

# 千手

古名

千手重衡

禅竹作

ワキ

狩野介宗茂

シテ

千手

ツレ

中将重衡

地は

相模

季は

夏

「これは鎌倉どの、御内に。狩野介宗茂にて候。さても相国のおん子重衡の卿は。此たび一谷の合戦に生捕られ給ひ候ふを。某あづかり申して候。朝敵のおん事とは申しながら。頼朝いたはしく思し召され。よく痛はり申せとの御事にて。昨日も千手の前を遣はされて候。かの千手の前と申すは。手越の長が娘にて候ふが。優にやさしく候ふとて。おん身ちかく召し使はれ候ふを遣はされ候ふ事。

まことに有難き御志にて御座候。今日はまた雨中御つれぐ。酒を勧め申さばやと存じ候。

「琴の音そへて音づるゝ。く。これや東屋なるらん。

「それ春の花の樹頭に栄え。秋の月の水底に沈むも。世のはかなさの有様を。見てもあはれや重衡の。その古は雲の上。かけても知らぬ身のゆくへ。波に漂ひ舟に浮き。さらばよるべのよそならで。有

りしにかへる有様かな。

下歌 「都にだにも留めぬ。御涙なるを痛はしや。

上歌 「陸奥の。忍ぶに堪へぬ雨の音。く。降りすさび  
たる折しもは。思ひの露もちりぐくに。心の花も  
しをくと。しをるゝ袖の色までも。今日の夕べ  
のたぐひかな。く。

シテ詞 「いかに案内申し候はん。

ワキ詞 「誰にて渡り候ふぞ。

シテ 「千手の前が参りたるよしそれく御申し候へ。

ワキ 「暫く御待ち候へ。御機嫌を以て申さうずるにて候。

重衡サシ

「身はこれ槿花一日の栄。命は蜉蝣の定めなきに似  
たり。心は蘇武が胡国に囚はれ。岩窟の内に籠め  
られて。君辺を忘れぬ志。それはやうりが謀にて。  
敵を亡ぼし旧里に帰る。我はいつとなく敵陣に籠  
められて。縲紲の責を受くる。知らず今日もや限  
ならん。あら定めなや候。

ワキ 詞 「いかに申し上げ候。千手の御参りにて候。

重衡 詞

「唯今は何のためにて候ふぞ。よし／＼何事にてもあれ。今日の対面は叶ふまじきと申し候へ。

ワキ

「畏つて候。いかに申し候。御参りの由申して候へば。何と思し召し候ふやらん。今日の御対面は叶ふまじきよし仰せ出だされて候。

シテ

「これも私にあらず。頼朝よりの御錠にて。琵琶琴持たせて参りたり。此由かさねて御申し候へ。

ワキ

「御錠の趣申して候へば。これも私にあらず。頼朝よりの御錠にて。琵琶琴持たせて参りたり。よし／＼御憚はさる事なれども。たゞこなたへと請ずれば。

シテ

「その時千手立ちよりて。

地

「妻戸をきり／＼と押し開く。御簾の追風にほひ来る。花の都人に。恥かしながら見々えん。げにや東の果しまで。人の心の奥深き。その情こそ都なれ。

花の春紅葉の秋。 たが思出となりぬらん。

重衡詞

「いかに千手の前。 昨日あからさまに申しつる出家の御暇の事聞かまほしうこそ候へ。

シテ詞

「さん候其由申して候へば。 朝敵の御事なるを私として。 出家を許し申さん事。 思ひも寄らずとこそ候ひつれ。 わらはも御心の内おしはかり参らせ。 いかほど細々と申して候へども。 かひなき出家の御望み。 痛はしうこそ候へ。

重衡

「くちをしや我一谷にて如何にもなるべき身の生捕られ。 今は東の果までも。 かやうに面をさらす事。 前世の報いといひながら。 又おもはずも父命により。 仏像を亡ぼし人寿を絶ちし。 現当の罪を果すこと。 前業よりなほ恥かしうこそ候へ。

シテ

「げにくは是は御理りさりながら。 かゝる例は古今に。 多き習ひと聞くものを。 独とな歎き給ひそとよ。

重衡「げによく慰め給へども。たぐひはあらじ憂き身の果。

シテ「昨日は都の花と栄え。

重衡「今日は東の春に来て。

シテ「移り変れる。

重衡「身のほどを。

地「思へたゞ。世は空蟬の唐衣。く。着つゝなれにし妻しある。都の雲井を立ち離れ。はるぐ来ぬ

る。旅をしぞ思ふ衰への。憂き身のはてぞ悲しき。水ゆく川の八橋や。蜘蛛手に物を思へとは。かけぬ情の中々に。馴るゝや恨みなるらん。く。

ワキ「今日の雨中の夕べの空。御つれぐを慰めんと。樽を抱きて参りつゝ。既に酒宴を始めんとす。

シテ「千手も此よし見るよりも。お酌に立ちて重衡の。御前にこそ参りけれ。

重衡「今はいつしか憚の。心ならずには思はずも。手まづ

遮る盃の。心一つに思ふ思ひ。

ワキ「それくゝいかに何にても。おん肴にと進むれば。

シテ「その時千手とりあへず。羅綺の重衣たる。情なき  
事を機婦に妬む。

三人「只今詠じ給ふ朗詠は。忝くも北野の御作。此詩を  
詠ぜば聞く人までも。守るべしとのおん誓なり。

重衡「さりながら重衡は。今生の望なし。

三人「たゞ来世の便こそ。聞かまほしけれと宣へば。

シテ「わらは仰せを承り。十悪といふとも引摂すと。

地「朗詠してぞ奏でける。

シテクリ「さてもかの重衡は。相国の末の御子とは申せども。

地「兄弟にも勝れ一門にも越えて。父母の寵愛かぎり  
なし。

シテサシ「されども時うつり。平家の運命ことぐく。

地「月の夜すがら声たてゝ。鳴くや牡鹿の津の国の。  
生田の河に身を捨てゝ。防ぎ戦ふと申せども。

シテ「森の下風木の葉の露。

地「落されけるこそあはれなれ。

クセ「いまは梓弓。よし力なし重衡も。引かんとするに  
いづかたも。網を置きたる如くにて。遁れかねた  
る淀鯉の。生捕られつゝ有りて憂き。身をうろく  
づの其まゝに。沈みは果てずして。名をこそ流せ  
川越の。重房が手に渡り。心の外の都入。

シテ「げにや世の中は。

地「定めなきかな神無月。時雨降りおく奈良坂や。衆  
徒の手に渡りなば。とにもかくにも果てはせで。  
また鎌倉に渡さるゝ。こゝは何くぞ八橋の。雲井  
の都いつか又。三河の国や遠江。足柄箱根うち過  
ぎて。明けもやすらん星月夜。鎌倉山に入りしか  
ば。憂き限ぞと思ひしに。馴るればこゝも忍音に。  
あはれ昔を思妻の。灯闇うしては。数行虞氏が涙  
の。雨さへ頻る夜の空。



シテ「四面に楚歌の声の内。

地「何とか返す舞の袖。 思ひの色にや出でぬらん。 涙を添へて廻らすも。 雪の古枝の枯れてだに。 花さく千手の袖ならば。 重ねていざや返さん。

地「忘れめや。(序の舞)

シテワカ「一樹の陰や一河の水。

地「皆これ他生の縁といふ。 白拍子をぞ謡ひける。

重衡「その時重衡興に乗じ。

地「そのとき重衡興に乗じ。 琵琶を引きよせ弾じ給へ

ば。 また玉琴の緒合に。

シテ「合はせて聞けば。

地「峰の松風かよひ来にけり。 琴を枕の短夜の転寐。 夢も程なく東雲もほのぐと。 明けわたる空の。

シテ「あさまにやなりぬべき。

地「あさまにやなりなんと。 酒宴を止め給ふ。 おん心の内ぞ痛はしき。

地「かくて重衡勅により。く。また都にとありしかば。武士守護し出で給へば。

シテ「千手も泣くく立ち出で。

地「なに中々の憂き契り。はやきぬぐに引き離るゝ。袖と袖との露涙。げに重衡の有様。目もあてられぬ気色かな。く。